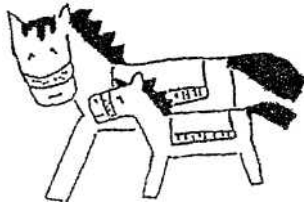


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと

23年 9月 NO. 202



〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://www4.ocn.ne.jp/~kouma/>

(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		9月の主な活動	～お気軽にどうぞ～
9月 9日	金	おはなしの会 10:00～11:30	ことばあそびや大型絵本での おいしいもののおはなしがあります。
9月 10日	土	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のクラスに入って いっしょにあそびましょう。
9月 24日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も 子育て体験においで下さい。
9月 24日	土	第1回孫まご塾 14:00～16:00	助産師さんによる「今と昔の子育ての 変化について」(事前申し込み要) 第2回10/29(土)、第3回11/19(土)
9月 26日	月	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	市図書館長馬場朋美さんの「図書館の 役わりと未来について」のお話や フリートークをします。
9月 27日	火	健康・育児相談 11:00～12:00	小児科園医師にゆっくり相談できます。

<p>・火～金の13時～16時までは、園内開放しています ので、親子でご来園下さい。 (但し、月・日曜・祭日は休み)</p>	<p>育児相談(月～土) 9:00～18:00 しつけや子育てについての悩み、保育園生活、 入園・見学についての相談もどうぞ。</p>
--	--

香川県高松市御坊町2-2
高松保育園 地域子育て支援センター



金子みすゞ
童話全集 6
さみしい王女・下より

世界中つづいた
大きなお風呂、
すてきなお風呂。
支那の子供も浸かっていよし、
くろい印度の子供も遊ば。
見えない遠いどこぞのふちにや、
そこじゃ弟と玩具の亀が、
ここじゃ私と西瓜の皮が、
お湯銭は要らぬ。
誰がはいると
天井は青空、
湯槽は白砂、
とても大きな
大きなお風呂。



高松市医師会看護専門学校¹の学生さん 38 名が当園で 7/26～8/12 まで実習をしました。その記録から実習して分かったことや感じたことをクラス別にご紹介しましょう。

ことりぐみ(0歳～1歳)

登園時に保護者より起床時間、家でのようす、体調(発熱の有無、下痢、嘔吐、食欲など)を記入していた。登園時に発熱がある児は、帰宅してもらおう。微熱(37.5度前後)ならば園であずかり、午後検温時に熱発や通常とちがったようすがあれば保護者に連絡をとっていた。

保護者も就業しており急に勤務変更等の都合がつかない場合もあるため、応急手当やかかりつけ医の情報を準備しておくことが重要である。集団生活の場であり感染予防の方法として家庭と保育園との連携が必要である。

1歳を過ぎると行動範囲が広がり、他の子どもの持つおもちゃに興味を示して、物の取り合いになり、もらえなかった子は泣いて先生の方をじっと見つめたり、取られた物の方を指さすなど自分の気持ちを伝える表現方法が、月齢によっても大きく変化があるということが分かった。まだ上手く言葉にできないため、泣いている時などには目を見て接し、共感的な態度で関わることで、子どもが見てくれているという安心感を得られるよう配慮すると同時に、人の物を取らないように声かけすることも成長の課題において重要だと感じた。

つくしぐみ(1歳～2歳)

先生の片づけしましょうという声かけにそれぞれがおもちゃのしまいをしていた。のこの前で、全員座って一日の始まりの挨拶ができていた。まだ日にちも理解できていない様子だが、分からないからしなくていいと考えるのではなく、一日一日の始まりを感謝と共に教えることは、とても大事だと感じた。

遊ぶ時におもちゃの名前を使用せずブーブー、プルプル、チュンチュンなど擬似音を用い

ることで園児に伝わりやすく同じようにまねをしコミュニケーションできた。食事ではスプーンを使うがうまく口に運ぶことができずこぼしていた。この時期の子どもは、こぼしたり手づかみであるが、自立にむけてしようとしているので叱らず自分で食べるといった事をしっかり褒める必要がある。アレルギーの子どもはテーブルをわけローチェアで間違えて食べないように注意している。

はとぐみ(1歳～2歳)

朝の体操は音楽に合わせて歌いながら体を動かすことができているが、お礼の際などじっとしていることができず、落ち着きがなく、隣の子と遊んでいる児もみられる。しかし、先生の方を見て静かに正座し手を合わせるなどきちんとできている子もいて、集団の中でのきまりを守ろうと努力している様子があった。1～2歳児は自分の欲求を上手く言葉であらわせないこともあり、体を使って伝えようとしている場面や、2語文がみられた。

4～9月生まれでわずか6ヶ月しか変わらないうが食事の仕方、速さ、量が全くちがっていて個人差が大きいと思った。

排泄も個人ではトレーニングはむずかしいが仲間と一緒にトレーニングをすることで楽しんでできているように感じた。安心できる環境のもと自分でやろうという気持ちがめばえているのではないかと考えられる。



つぼみ青ぐみ(2歳~3歳)

2歳児は遊びが大好きで、食事や他の行動を促そうとしても、なかなか素直に受け入れてくれるとは限らないが、それは自分が“遊びたい”という意志を持ち、表出しようとする成長過程の一部であることが理解できた。

集団生活であるため、規律を守るとともに、そういった個々の感情表現も摘みとってしまわないよう尊重し、拒否行動が見られる園児に対しては、なぜ嫌なのか理由を聞くなどして一

人の人間として対応を考える必要がある。

感染 - 園内でなんらかの感染症にかかった人が現われると全クラスに放送などで連絡を行い情報を共有する。また保護者にも連絡を行う。ただ感染症が出たことだけを伝えるのではなく、りんご病では、妊娠初期の女性が発症すると胎児に影響を及ぼす危険もあるといった情報提供も行っていった。

つぼみ赤ぐみ(2歳~3歳)

排泄の時間は日中で4回ほどあるが、それ以外にも各児が自ら「トイレに行く」と訴えてくるように、常に声をかけている。

つぼみ赤ぐみは20人程いるので、5~6人ずつトイレに行くように声をかけ、残りの児は絵本を読んだり歌を歌いながら、フロアで順番を待ってもらう。パンツやズボンは、各児が自分で着脱できるように、自分で行うよう声をかける。トイレは、園児用に作られているので、便器も30~40cmほどの高さに設置されている。排泄が終わっても便器に座ったまま動かない児もいるが、そのような児に対しては、他の児も使用することを話し、自分だけのものではないという意識を持たせるように対応していくことが必要である。トイレが終わったら、各児で手を洗わせることで、手洗いと手指衛生の必要性の習慣づけをしている。

トイレトレーニングは、集団生活の中でのいると、より個人差が目立つが、個人のペースを乱さず、見守ることも必要である。できなかった時には叱るのではなく、受けとめ、次頑張ろうねと優しく言葉をかけ、自尊心を傷つけないような対応が成長発達には必要であることを学んだ。

さくらぐみ(3歳~4歳)

不審者避難訓練の際、保育士の指示に従い、避難できていたことで、各園児の安全が確保できていたが、実際に起きた場合、より大きな混乱を招くことが予想される。そのとき、冷静に対応すること、また3・4歳児の小児では危険予知能力が未熟なため、避難の際、転倒や他児との衝突などのリスクが考えられる。安全に避難できるよう日々対応、対処の練習をしておくことが必要である。

また、不審者に対して、恐怖や不安などの感情が出現する可能性があるため、精神的な援助も今後必要になってくると考えられる。

5歳児と3歳児と鬼ごっこをしたが、2歳の差は大きく5歳の子どもは「誰が鬼？」とルールを理解した上で遊ぼうとするが3歳児はよるこんで走り回り走ることを楽しんでた。3歳児はみんなで遊ぶというより個人で楽しんでいることが多い。

ほめられて素直にうれしそうにしているのを何度も見て、素直であることは成長のかてになるため、子どもを見習いたいと感じた。



ほしくみ(4歳~5歳)

交通安全教室では、交通指導員の言っていることを集中して聞いている園児がほとんどで、集中力、また交通指導員の説明に対する理解力がみられた。帰りのお礼の時に交通ルールに対する理解ができているか確認すると大体の園児は覚えていた。大人の交通ルールの遵守が園児の交通ルールの理解力向上に必要と考えられる。

食事の際、食器を手のひらで不安定に持っている園児がおり、食器をおとす可能性があったため、保育士が注意する。自宅でも同じことをしても親は注意しないのか、注意されてもかまってほしさに同じことをしてしまうのだろうか？



すみれぐみ(5歳~6歳)

あいうえお教室では、個人差が大きく今回は小学校にあがってよく使うひらがなと1-10までの数字についての内容だったが答えられない子、速やかに答える子、答えはわかっているか発表しない子など色々であった。一人一人に気を配り、必要時に声かけをし集団生活の中で他の人と協力しルールを守るということを教えていた。

絵画の時間、園児たちにスケッチブックが配布され、カボチャ、ゴーヤなどの野菜を写生し

ていた。園児たちのほとんどが真剣に行っていたが、数人は色が違う、全く形が違うなど、観察もほとんどせずに描いていた子がいた。

野菜を描いている園児の中には上手な子、下手な子もいるが、それ相応に描くことができている。しかし主旨と違うことを描いている子はすぐに手を止め、席の横の子の絵を見て、何か発言したり、クレヨンで遊んだりと集中力に欠けていたと考えられる。野菜でも様々なもの、自分が好きな野菜なども描けるよう配慮も必要であるかと考える。

おうまのおやこ通信7月、8月で「木のおもちゃで育つもの」パート、パートをご紹介します。そのオークヴィレッジ代表の稲本正さんのことが7月29日の読売新聞の「顔」という欄に載っていましたので、ご紹介します。

東北で採れたドングリを苗木にする「育て親」を募集し、2年後の春、東日本大震災の被災地や周辺の森への植樹を目指す。植える木は、犠牲者の数に相当する広葉樹2万本余り。「鎮魂と、森の再生を通じた日本の復興を祈るためです」

1974年に岐阜県・飛騨高山の荒れ地で植林を始め、工芸村「オークヴィレッジ」を設立、木を使ったもの作りと環境保護運動に携わってきた。震災を機に、「近代以降の化石資源に頼った大量消費社会を見直し、持続可能な木の文化を取り戻す必要がある」と痛感。仮設・復興住宅への国産材の活用や、荒れた森林の間伐、植林を提唱する。

この考えに、映画「木を植えた男」で知られるカナダのアニメ作家、フレデリック・バックさん(87)も共鳴。東京都現代美術館で開催中の「フレデリック・バック展」(10月2日まで)の会場で、苗木や種の引換券が付いたドングリ形ストラップや小物入れの販売を始めた。10月には宮城・岩手県境の森でドングリ拾いツアーも行う。「美しい森と水が日本の資源。今こそ再確認のチャンスです」



被災地に植樹する「緑の国プロジェクト」に取り組む